

漁海況年報

令和5年1月1日～令和5年12月31日

【黒潮流路】

図1に黒潮流型の区分を、表1に直近20年の半月毎の流型を示した。また、図2には令和5年1～12月における月の前半・後半の代表的な黒潮流路を示した。

令和5年の黒潮流路は、平成29年9月に発生したA型が継続し、7月中旬に一時的に八丈島の南を通過する非典型的大蛇行流路となったが、年を通じてA型で推移した。

静岡県水産・海洋技術研究所
(電話 054-627-1815)

静岡県水産・海洋技術研究所伊豆分場
(電話 0558-22-0835)

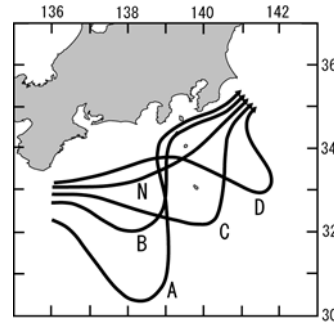


図1 黒潮流型の区分

表1 黒潮流型の経過

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
H16年	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
H17年	A	A	A	A	A	A	A	C	C	C	C	D
H18年	N	N	N	NB	C	C	N	N	N	N	N	N
H19年	N	BC	D	B	B	C	C	C	C	C	N	N
H20年	C	C	N	N	N	N	B	B	C	C	C	C
H21年	C	C	C	C	C	WB	C	C	C	C	C	C
H22年	D	DN	N	BC	N	N	W	C	CD	D	N	N
H23年	N	N	N	B	B	C	C	DW	N	BC	C	DN
H24年	N	N	N	B	C	C	C	N	B	C	C	DN
H25年	CW	ND	D	DN	N	N	NB	B	BC	C	C	C
H26年	C	C	C	C	C	W	C	BC	N	N	BC	N
H27年	N	BC	C	W	WB	C	C	C	C	CD	DC	DN
H28年	C	CN	N	N	NB	BC	C	C	C	C	C	CB
H29年	B	BC	C	C	B	C	C	C	CD	DW	W	B
H30年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
R元年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
R2年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	AB	NA
R3年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
R4年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
R5年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A

参考資料：海洋速報（海上保安庁）、関東・東海海況速報

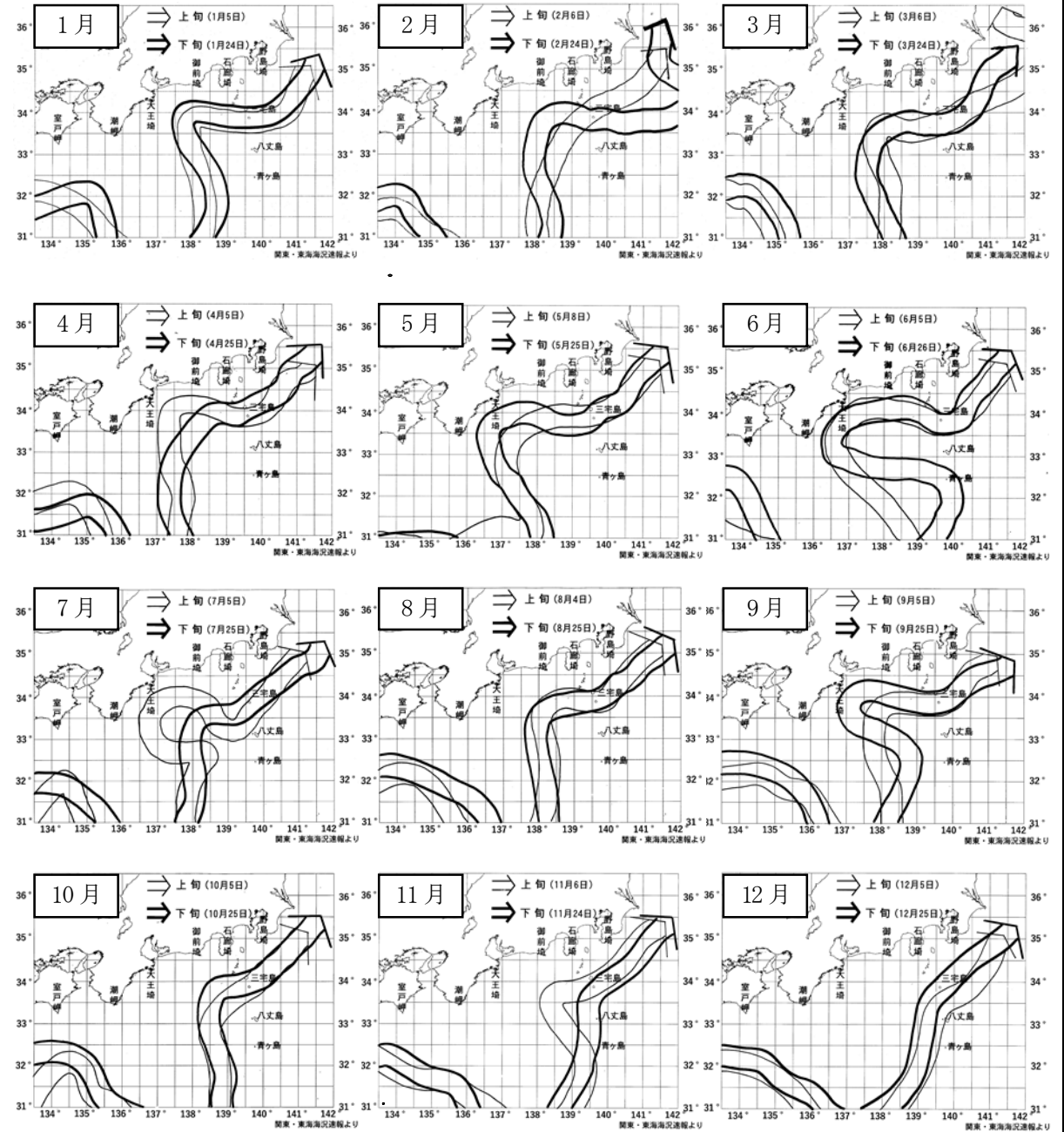


図2 令和5年の月別黒潮流路（⇒上旬 ⇒下旬 関東・東海海況速報から）

[県 下 沿 岸 域]

図3に令和5年1～12月における旬別の沿岸平均水温を示した。

令和5年の県下沿岸水温は、伊豆東岸（伊東・稲取・下田）、駿河湾（雲見・沼津・焼津）で概ね「平年並」～「極めて高め」で推移した。

月毎の測点別の沿岸水温は、次のとおりであった。

- 1月は伊東、稲取、下田で「平年並」、雲見、沼津、焼津で「やや高め」であった。
- 2月は雲見で「高め」、それ以外の地点で「やや高め」であった。
- 3月は伊東、稲取、下田、雲見で「高め」、沼津、焼津で「やや高め」であった。
- 4月は全ての地点で「やや高め」であった。
- 5月は焼津で「平年並」、それ以外の地点で「やや高め」であった。
- 6月は焼津で「平年並」、それ以外の地点で「やや高め」であった。
- 7月は稲取、焼津で「平年並」、伊東、下田、雲見、沼津で「やや高め」であった。
- 8月は全ての地点で「高め」であった。
- 9月は稲取、下田で「やや高め」、伊東、雲見、焼津で「高め」、沼津で「極めて高め」であった。
- 10月は下田、沼津で「平年並」、伊東、稲取、雲見、焼津で「やや高め」であった。
- 11月は稲取、下田、沼津、焼津で「平年並」、伊東、雲見で「やや高め」であった。
- 12月は稲取、下田、焼津で「やや低め」、伊東、雲見、沼津で「平年並」であった。

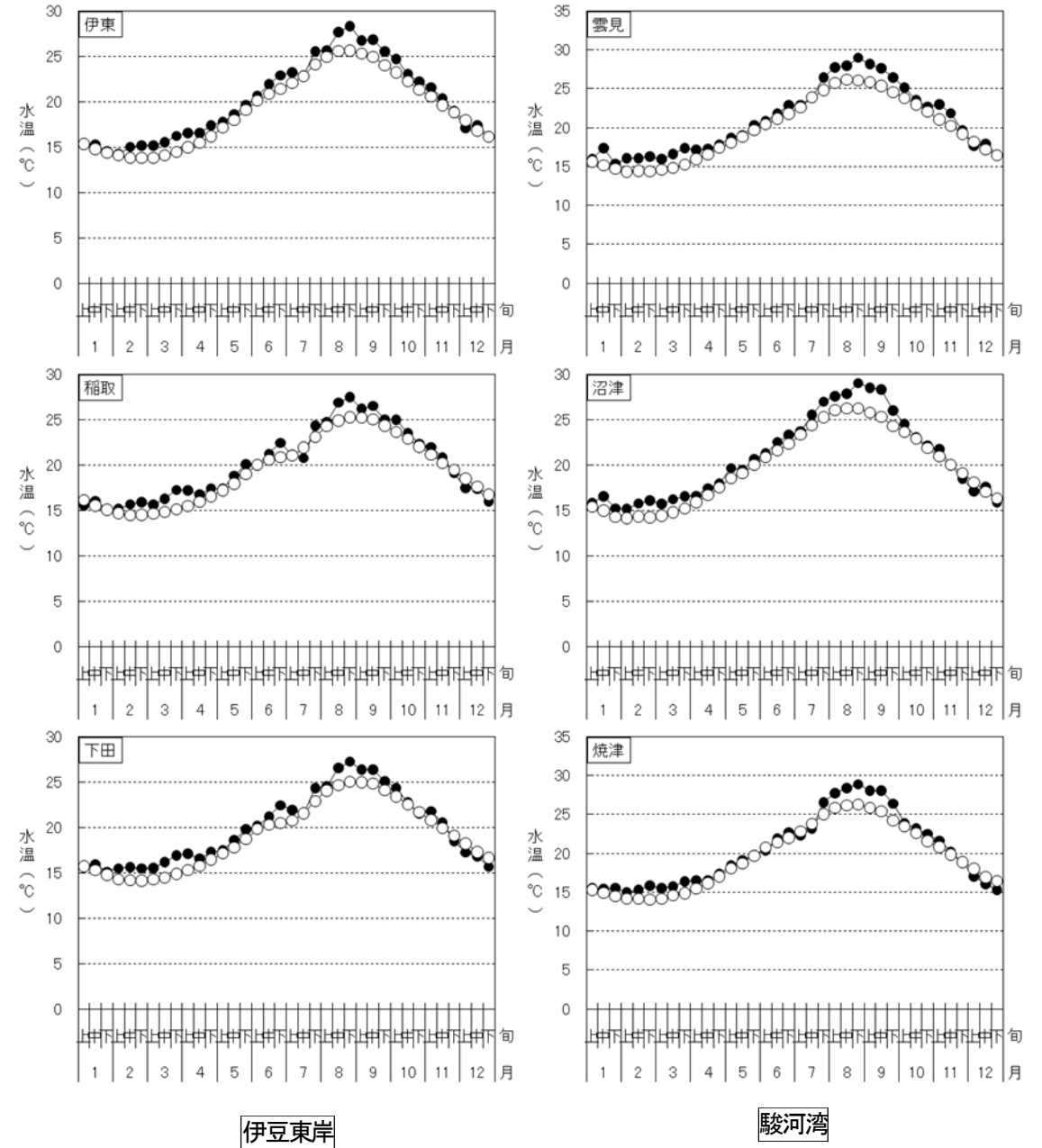


図3 令和5年1～12月の旬別沿岸水温 (●：令和5年値 ○：平年値※)
※平成3年～令和2年の30年平均値

[サバたもすくい棒受網]

1 たもすくい (令和5年1~12月)

静岡県船のたもすくいの操業は、1月10日に大島千波でゴマサバを主体に始まった。その後、2月12日に漁場水温18℃台の利島で千葉、15日に大島千波で静岡の各県民間船が操業を行い、今漁期のマサバの初漁日となった。漁場は2月中は海面水温17~19℃の大島千波に形成されたが、漁獲はゴマサバ主体であった。中旬から伊豆諸島北部海域(大島千波~利島)にマイワシ成魚の群れが広く分布し、マサバ魚群の上層に濃密に集群したため、操業が難しい状況であったが、大島千波での操業が継続した。3月上旬は海面水温17~18℃の大島千波でゴマサバ主体の漁獲があり、中下旬は海面水温19~20℃の三宅島周辺海域(三本)にマサバ主体の漁場が形成された。4月は中旬以降に利島が主漁場となり、全船たもすくい操業でマサバ主体の操業を行い、最大29トン/隻の好漁が継続した。また、大島千波及び三本ではゴマサバ主体の操業が行われた。5月上旬は利島に、下旬は利島に漁場が形成され、ゴマサバ主体の操業が行われたが、マサバはほとんど漁獲されなかった。6月は利島でゴマサバ主体の操業が継続したが、散発的に漁獲される程度であった。7月上~中旬は北部海域の利島、ひょうたん瀬及び御前崎沖に漁場が形成されたが、低調な漁況であった。7月下旬~8月上旬は棒受網漁業を行っていた。8月下旬になると、利島に漁場が形成されたことから、全船がたもすくい網漁業へと転向した。8月中旬は操業がなかった。9月、10月は利島及び大島千波に、11月、12月は大島千波に漁場が形成された。その後、大島千波での操業が12月中旬まで継続した後、今期のたもすくい操業は終漁となった。

令和5年1~12月における千葉・静岡の2県主要5港^{※1}の水揚量は、マサバが572トン(延べ出漁隻数383隻)で、前年の1,449トン(294隻)を大きく下回り、ゴマサバは2,573トンで、前年(2,089トン)を大きく上回った。また、静岡県船の1~6月のマサバCPIE(1夜1隻)は1.9トンで前年(8.4トン)を大きく下回った。

※1 千葉県:千倉・富浦、静岡県:伊東・沼津・小川の5港

2 棒受網 (令和5年4、7~8月)

令和5年は3月までたもすくい操業を行っていたため、今漁期の棒受網操業は4月9日夜に初漁を迎え、三宅島周辺海域に漁場が形成された。4月中旬~7月中旬までは全船たもすくい漁業を行っていた。7月下旬になると、御前崎沖に漁場が形成され、全船が棒受網の操業を開始した。8月上旬も引き続き御前崎沖が漁場となった。8月下旬になると、北部海域の利島に漁場が形成されたことから、全船がたもすくい網漁業へと転向した。以降、利島や大島千波といった北部海域に漁場が形成され続けたことを受け、今期の棒受網漁業は終漁となった。

令和5年の静岡県主要4港^{※2}における水揚量は、マサバは3.3トンで前年(32.6トン)を大きく下回り、ゴマサバは33.8トンで前年(684.9トン)を大きく下回った。また、ゴマサバCPIE(1夜1隻)は5.6トンで、前年(11.4トン)を大きく下回った。

※2 伊東・静浦・沼津・小川の4港

3 ゴマサバ年齢別漁獲尾数

漁獲されたゴマサバの尾丈長範囲は30~37cmであった。年齢別漁獲尾数の割合は、0歳魚(2023年級群)が0.1%、1歳魚(2022年級群)が6.5%、2歳魚(2021年級群)が33.1%、3歳魚(2020年級群)が29.7%、4歳(2019年級群)以上が30.6%であり、2、3歳魚が漁獲の主体となった。

3 小川魚市場におけるさば類単価 (表2)

令和5年の小川魚市場におけるたもすくい・棒受網のサバ類月別単価は、マサバが153~328円/kg(1~6月)、ゴマサバが156~216円/kgであった。マサバ、ゴマサバともに全国的な不漁を受け、価格は高値で推移している。

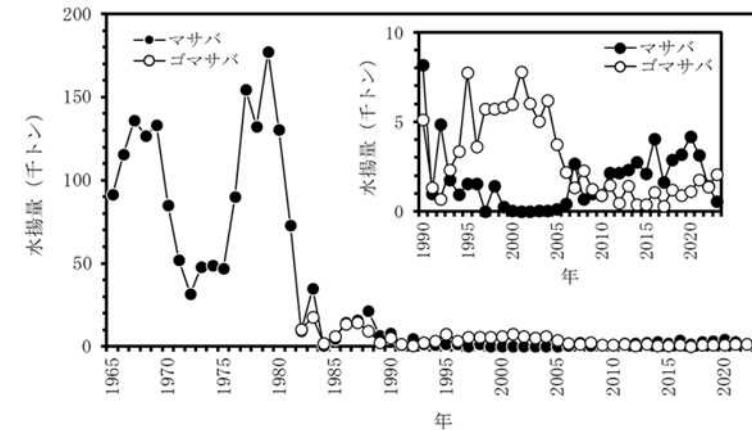


図4 たもすくいによる2県主要5港でのマサバ・ゴマサバ水揚量の経年変化(1~6月)(東日本さば釣漁業協会資料)

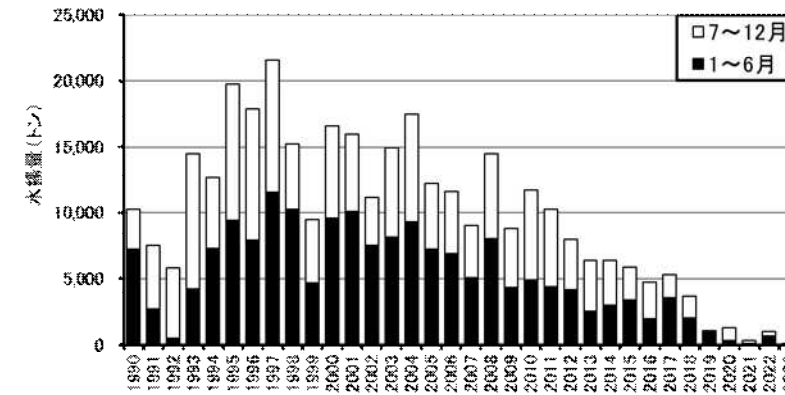


図5 棒受網によるゴマサバ水揚量の経年変化(静岡県主要4港) ※2009年以前はたもすくいによる水揚げも含む

表2 小川魚市場(焼津市)における棒受網・たもすくいのさば類月別単価 (単位:円/kg)

年	魚種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
令和1年	マサバ	128	121	110	89	81	177	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	118	119	117	99	85	84	123	88	540	128	128	130
令和2年	マサバ	156	125	81	88	98	271	332	-	-	-	-	216
	ゴマサバ	121	120	128	116	112	138	134	122	100	121	102	102
令和3年	マサバ	203	96	79	61	106	124	-	-	-	-	187	127
	ゴマサバ	114	111	82	92	107	103	123	121	155	131	138	124
令和4年	マサバ	126	121	86	95	165	191	-	324	-	-	203	-
	ゴマサバ	111	100	75	92	160	117	143	171	168	141	150	161
令和5年	マサバ	328	266	184	168	153	171	-	-	-	-	-	237
	ゴマサバ	212	195	185	212	170	180	175	194	163	156	207	216

[サクラエビ船曳網]

春漁は4月4日夜～6月7日夜にかけて操業が行われた。この春漁ではサクラエビの主産卵場である湾奥に1日当たりの操業隻数を最大10ヶ統とした保護区を設定する等の産卵エビの保護を目的とした自主規制が導入された。出漁日数は20日、漁獲量は308.9トンで、漁場は主に沼津沖～由比沖に形成された（前年の出漁日数は23日、漁獲量は202.0トン）。漁獲されたサクラエビは、平均体長38.3mm（前年は35.1mm）の0歳エビ（2022年生まれ）が主体であった（図6）。

秋漁は11月1日夜～12月24日夜にかけて操業が行われた。この秋漁では産卵後の1歳エビ（2022年生まれ）を漁獲の主体とし、2024年春に親となる0歳エビ（2023年生まれ）への漁獲圧を低減するため、海域ごとに異なる1歳エビ割合の漁獲可能基準を設定した自主規制が導入された。出漁日数は17日、漁獲量は192.0トンで、漁場は主に大井川沖～相良沖に形成された（前年の出漁日数は14日、漁獲量は181.7トン）。漁獲されたサクラエビは、平均体長31.8mm（前年は31.3mm）の0歳エビと平均体長40.8mm（前年は39.2mm）の1歳エビの2群で構成された（図7）。

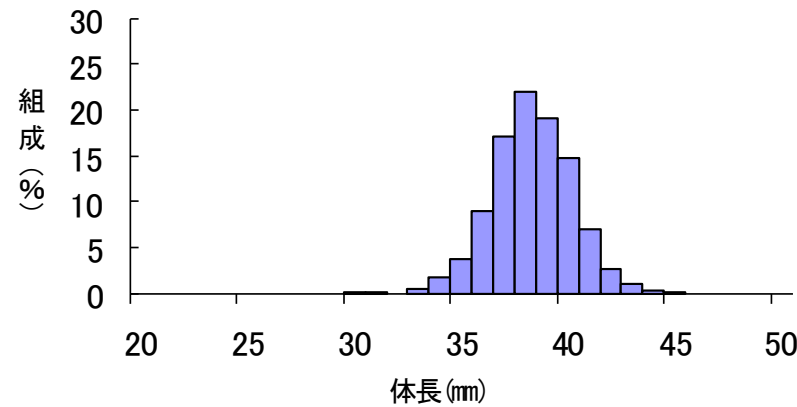


図6 令和5年春漁で漁獲されたサクラエビの体長組成

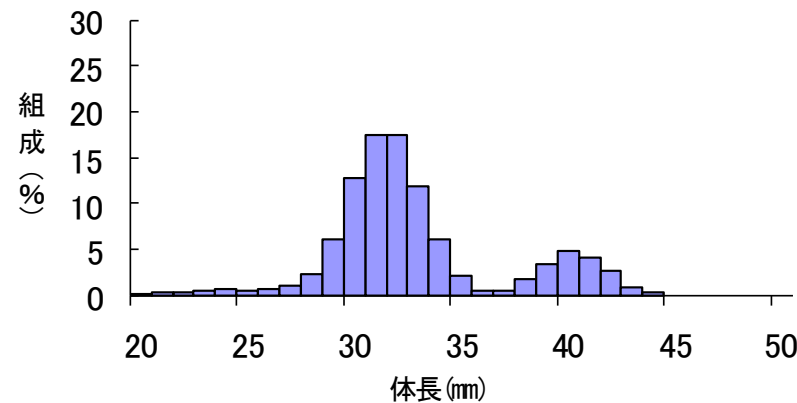


図7 令和5年秋漁で漁獲されたサクラエビの体長組成

[竿釣り近海カツオ]

1 水揚量と魚価

令和5年の静岡県主要5港（沼津、清水、焼津、小川、御前崎）における近海・沿岸竿釣り船の水揚量は829トンで、前年の722トンを上回り、過去5年平均（1,005トン）の82%であった（表3、図8）。

魚価は445円/kgで前年（459円/kg）を下回り、過去5年平均（379円/kg）を上回った（表3、図9）。

2 漁況（漁場形成と魚体）

御前崎港での魚体測定及び漁場聞き取り調査から、漁況はおおむね次のとおり推移した。

- 1月 水揚げなし
- 2月 小笠原諸島周辺海域で操業した近海竿釣り船の水揚げが2月23日から始まった（小銘柄）。
- 3月 駿河湾沖で操業した沿岸竿釣り船の水揚げが始まった（小銘柄）。近海竿釣り船は伊豆諸島北部海域で操業し、小（尾叉長48cm）カツオを主体に水揚げした。
- 4月 沿岸、近海竿釣り船が大王崎～伊豆諸島北部海域で操業し、小（尾叉長45cm）カツオを主体に水揚げした。
- 5月 沿岸竿釣り船が駿河湾沖～伊豆諸島北部海域で、近海竿釣り船が駿河湾沖で操業し、小（尾叉長47cm）カツオを主体に水揚げした。
- 6月 沿岸竿釣り船が大王崎～伊豆諸島北部海域で、近海竿釣り船が房総沖で操業し、小（尾叉長49cm）カツオを主体に水揚げした。
- 7月 沿岸竿釣り船が伊豆諸島北部海域で操業し、小（尾叉長48cm）カツオを主体に水揚げした（近海竿釣り船の水揚げなし）。
- 8月 沿岸、近海竿釣り船が伊豆諸島北部海域で操業し、小（尾叉長47cm）カツオを主体に水揚げした。
- 9月 沿岸竿釣り船が駿河湾沖～伊豆諸島北部海域で、近海竿釣り船が伊豆諸島北部海域で操業し、小（尾叉長49cm）カツオを主体に水揚げし、特大（尾叉長67cm）が混じった。
- 10月 沿岸、近海竿釣り船が駿河湾沖～伊豆諸島北部海域で操業し、小（尾叉長44cm）カツオを主体に水揚げした。
- 11月 沿岸竿釣り船が伊豆諸島北部海域で、近海竿釣り船が駿河湾沖で操業し、小（尾叉長46cm）カツオを主体に水揚げした。
- 12月 沿岸竿釣り船1隻のみ水揚げがあった（操業情報及び魚体サイズ不明、近海竿釣り船の水揚げなし）。

表3 令和5年近海・沿岸竿釣り船のカツオ水揚量等（県内主要5港）

年 月	水揚量 (トン)	水揚 隻数	水揚/隻 (トン)	平均 単価 (円/kg)	主漁場と魚体 () 内は尾叉長モード、単位はcm
R5年1月	-	-	-	-	-
2月	10	1	9.5	539	小笠原諸島周辺海域(未測定)
3月	23	8	2.9	597	駿河湾沖、伊豆諸島北部海域(48)
4月	82	24	3.4	576	大王埼～伊豆諸島北部海域(45)
5月	155	37	4.2	472	駿河湾沖～伊豆諸島周辺海域(47)
6月	118	38	3.1	429	大王埼～伊豆諸島北部海域(49)
7月	115	46	2.5	383	伊豆諸島北部海域(48)
8月	95	32	3.0	422	伊豆諸島北部海域(47)
9月	144	40	3.6	361	駿河湾沖～伊豆諸島北部海域(49、67)
10月	59	23	2.6	426	駿河湾沖～伊豆諸島北部海域(44)
11月	27	11	2.5	612	駿河湾沖、伊豆諸島北部海域(46)
12月	1	1	0.8	975	-(未測定)
R5年計	829	261	3.2	445	
R4年計	722	196	3.7	469	
過去5年平均	1,005	303	3.4	379	平成30年～令和4年の平均

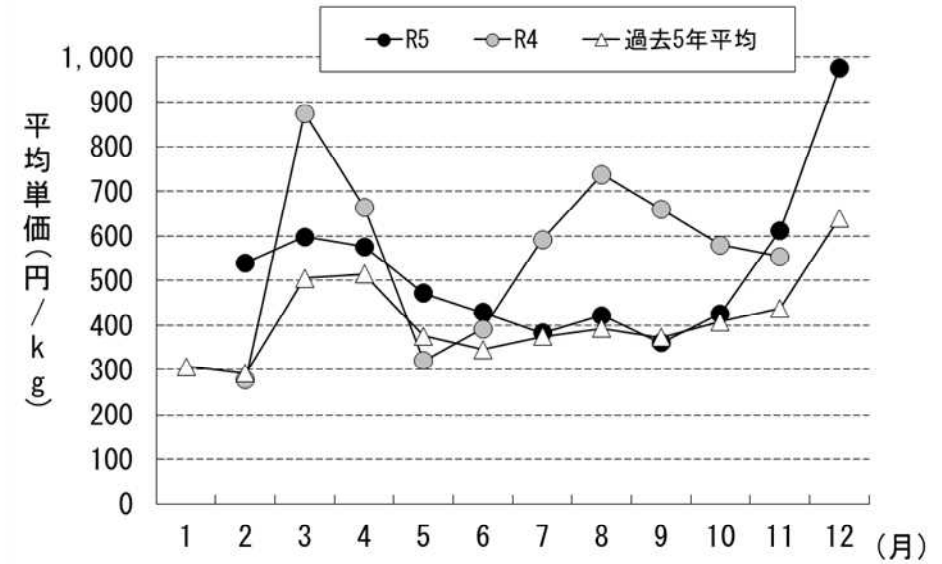


図9 近海・沿岸竿釣りカツオの平均単価の推移

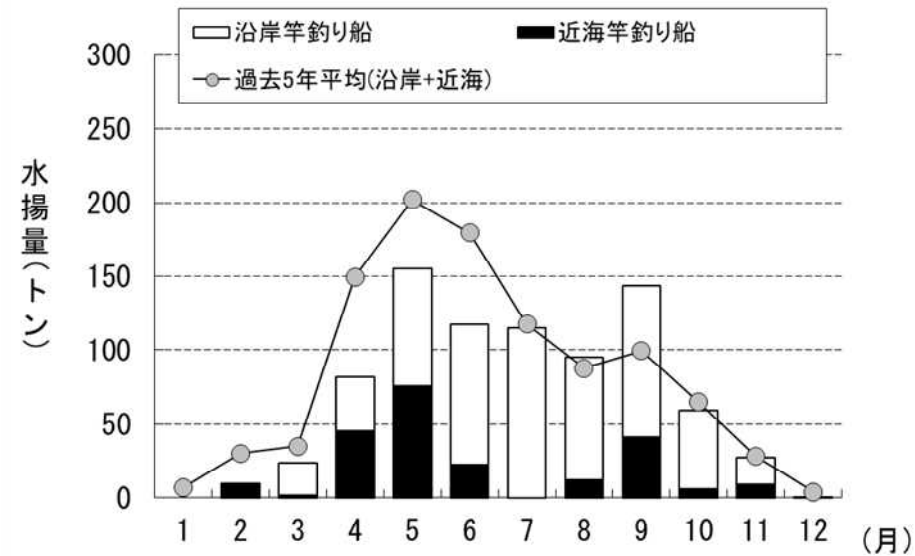


図8 近海・沿岸竿釣りカツオの月別水揚量の推移

【まき網（いわし類）】

1 マイワシ

令和5年における伊東港の総水揚量は88トンで、前年(720トン)の12%、**平年**※(902トン)の10%であった。最も水揚量が多かったのは12月で22.4トンであった。

沼津港の総水揚量は1,954トンで、前年(5,383トン)の36%、**平年**(4,132トン)の47%であった。最も水揚量が多かったのは3月で745トンであった。

小川港の総水揚量は1,106トンで、前年(3,152トン)の35%、**平年**(1,806トン)の61%であった。最も水揚量が多かったのは3月で670トンであった。

2 カタクチイワシ

令和5年における沼津港の総水揚量は2トンで、前年(37トン)の4%、**平年**(82トン)の2%であった。小川港の総水揚量は0.1トンで、前年(9トン)の1%、**平年**(31トン)の0.4%であった。

※平年：過去5カ年(平成30～令和4年)平均

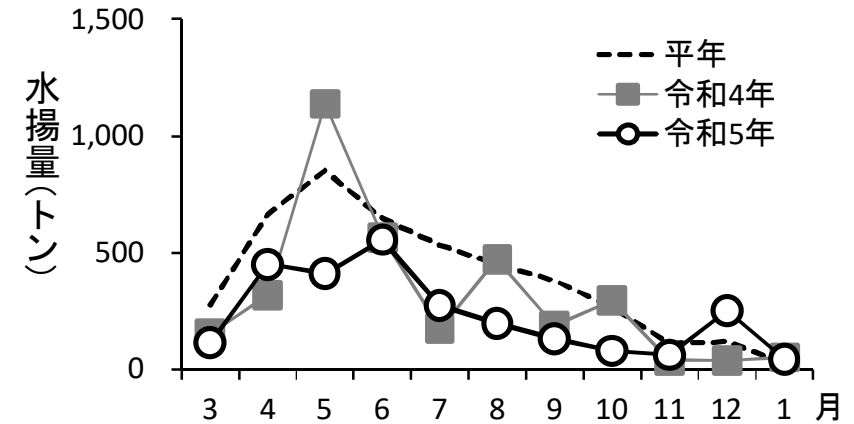


図10 令和5年漁期 主要6港 シラスの水揚量の推移

【シラス船曳網】

令和5年の主要6港(用宗、吉田、御前崎、福田、舞阪、新居)における総水揚量は2,574トンで、前年(3,436トン)の75%、**平年**※(4,876トン)の53%であった。また、駿河湾(用宗、吉田)では1,126トンで、前年(1,443トン)の78%、**平年**(1,621トン)の69%であった。遠州灘(御前崎、福田、舞阪、新居)では1,449トンで、前年(1,993トン)の73%、**平年**(3,255トン)の45%であった。総水揚金額は39.2億円で、前年(30.3億円)の1.3倍、**平年**(39.1億円)の1.0倍であった。平均単価は1,552円/kgで、前年(881円/kg)の1.7倍、**平年**(802円/kg)の1.9倍であった。

3月は115トンで前年(153トン)の75%、**平年**(351トン)の33%であった。4月は451トンで前年(316トン)の1.4倍、**平年**(868トン)の52%であった。5月は411トンで前年(1,137トン)の36%、**平年**(1,026トン)の40%であった。6月は555トンで前年(565トン)の98%、**平年**(578トン)の96%であった。7月は274トンで前年(176トン)の1.6倍、**平年**(538トン)の51%であった。8月は196トンで前年(472トン)の42%、**平年**(474トン)の41%であった。9月は132トンで前年(190トン)の70%、**平年**(439トン)の30%であった。10月は80トンで前年(296トン)の27%、**平年**(316トン)の25%であった。11月は62トンで前年(39トン)の1.6倍、**平年**(172トン)の36%であった。12月は253トンで前年(39トン)の6.5倍、**平年**(88トン)の2.9倍であった。1月は45トンで前年(52トン)の86%、**平年**(26トン)の1.7倍であった。

シラスの魚種別の漁況は、カタクチイワシのシラスが漁期を通じて漁獲され、最も水揚量が多かったのは、6月(555トン)であった。マイワシのシラスは3～5月に漁獲され、最も水揚量が多かった月は4月(165トン)で、最も水揚割合が多かった月も4月(40%)であった。ウルメイワシのシラスは3～5、12～1月に漁獲され、最も水揚量が多かった月は5月(51トン)で、最も水揚割合が多かった月も5月(13%)であった(図11)。

※平年：過去5カ年(平成30～令和4年)平均

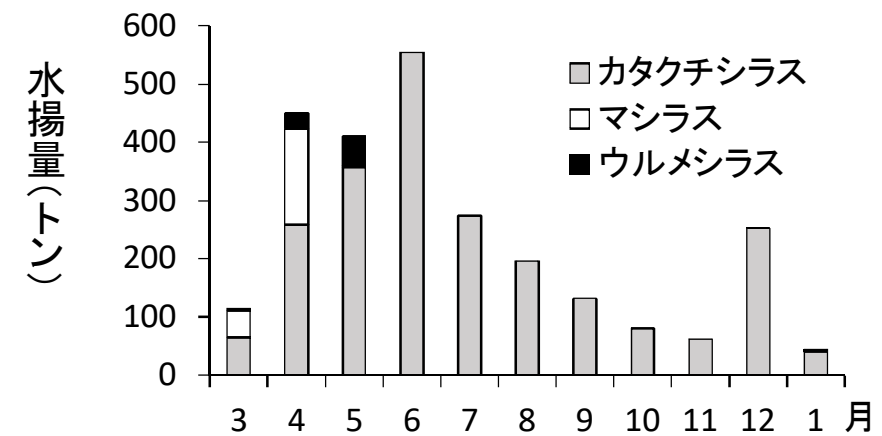


図11 令和5年漁期 主要6港 シラスの魚種別水揚量の推移

[定 置 網]

令和5年の伊豆半島東岸大型定置網7か統（伊豆山、古網、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津）の水揚量は4,277トンで、前年水揚量4,619トンの93%、平年値（昭和57年～令和4年平均）3,941トンの1.1倍であった。月別漁獲量では、2、4、5、8～11月に前年を大きく上回ったほか、6、7月は前年を上回り、1、3、12月は前年を大きく下回った（図12）。

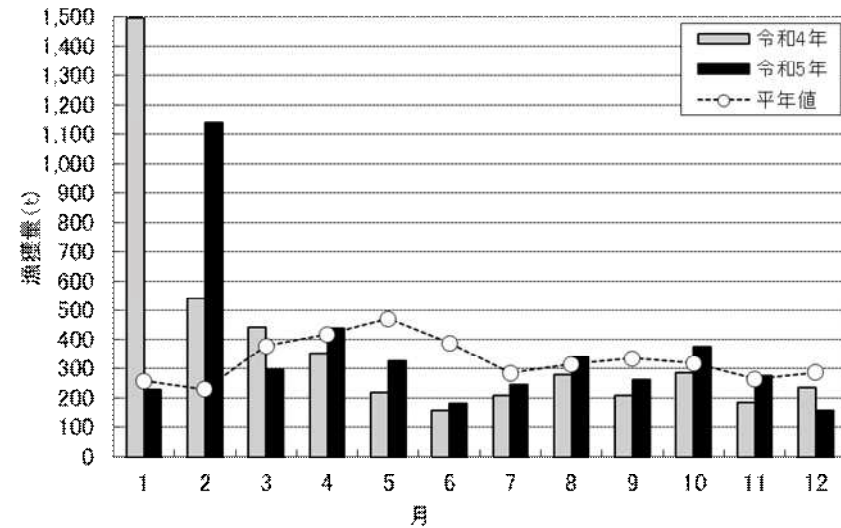


図12 月別水揚量の推移

漁場別水揚量は、谷津、赤沢漁場は前年を大きく上回り、伊豆山、北川漁場は前年を上回ったが、古網、富戸漁場は前年を大きく下回った。水揚量の多かった漁場は、順に伊豆山（マイワシ、マアジ、ブリ主体）、北川（さば類、マイワシ、ヤマトカマス主体）、川奈（ブリ、マイワシ、さば類主体）漁場であった（図13）

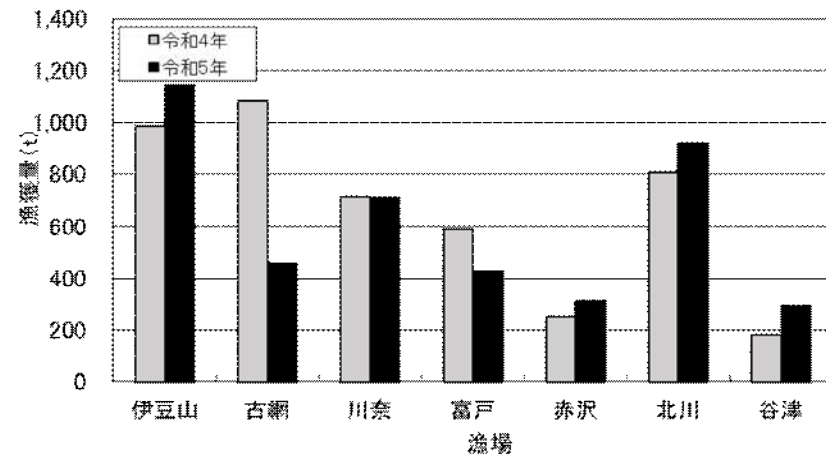


図13 漁場別水揚量

多獲された魚種（上位10種）の水揚量は表4のとおりで、ブリ、ヤマトカマス、マルソウダ、マアジは前年を大きく上回り、さば類、スルメイカは前年を大きく下回った。

マイワシは1341.6トンで、前年比90%、平年比3.5倍であった。特に2月の水揚量が1,080.2トンとなり、2月の漁獲量としては記録のある昭和57年以降で最多であった。

さば類は645.4トン、前年比45%、平年比の65%で、6、7、11月に水揚量が前年を大きく上回ったが、1～3月及び8～10月では前年を大きく下回った。さば類のうち、マサバは80.3トンで、前年比22%、平年比59%、ゴマサバは565.2トンで、前年比52%、平年比57%、さばっこ（小型当歳魚銘柄）は93.3トンで、前年比97%、平年比1.3倍であった。

ブリは616.3トン、前年比2.2倍、平年比2.3倍で3、4月に水揚量が多かった。銘柄わらさ、ぶり主体で、わらさは528.2トンで前年比2.4倍、平年比4.9倍、4月に313.9トンが漁獲され、4月の漁獲量としては記録のある昭和57年以降で最多であったが、この中には6kg以上の本来ぶり銘柄に含まれる個体がかかり含まれており、特に3月下旬から4月上旬にかけては、出荷されたほとんどのロットで平均体重が6kgを上回っていた。ぶりは72.5トンで前年比1.7倍、平年比68%であった。

ヤマトカマスは298.6トン、前年比4.6倍、平年比3.9倍で、10月に146.3トンが漁獲され、10月の漁獲量としては記録のある昭和57年以降で最多であった。

マルソウダは273.7トン、前年比1.3倍、平年比1.1倍で、1月の水揚量が63.1トン、3月の水揚量が5.7トンとなり、1月及び3月の漁獲量としては記録のある昭和57年以降で最多であった。

マアジは265.6トンで前年比1.4倍、平年比0.5倍であった。また、マアジのじんだ銘柄は79.5トンで前年比134.5倍、平年比2.7倍で、5月に11.7トンが漁獲され、5月の漁獲量としては記録のある昭和57年以降で最多であった。

表4 多獲された魚種の水揚量

魚種	水揚量 (トン)	前年比	平年比
マイワシ	1341.6	0.90	3.45
さば類	645.4	0.45	0.65
ブリ	616.3	2.19	2.25
ヤマトカマス	298.6	4.63	3.86
マルソウダ	273.7	1.31	1.11
マアジ	265.6	1.43	0.50
スルメイカ	106.5	0.72	0.53
イサキ	54.5	1.17	0.96
シイラ	49.6	1.64	0.79
ふぐ類	47.5	1.79	2.78

静岡県水産・海洋技術研究所のホームページ

トップページ …… <https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/>

海洋情報のページ …… <https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/O1ocean/>

右のQRコードから、人工衛星による観測情報、県内沿岸水温情報、

関東・東海海況速報等を見ることができます。

